

市民による流域の健やかな水ネットワーク保全活動

NPO法人 水のフォルム

はじめに

「流域」は地球のパーツ。流域の水循環が健やかになれば地球環境は良くなるはず、と考えました。とはいえ水と言えば蛇口の水しか思い浮かべない私たちには、流域の水と言っても、すぐにはピンときません。

そこで同志を募り、水のフォルムを立上げ、暮らしの場のある荒川流域に焦点を当て、流域のさまざまな水を学びながら機関誌『水のFORUM』を発行し、流域の水への理解を深め・広める活動から始めました。

平成14年の創刊以来、荒川下流から順次上流へ廻り、10号で「下水」をテーマに荒川を下り、それまでの特集記事を『荒川流域を知るI』にまとめました。平成25年度末で、荒川もう一つの水みちとして武蔵東部の流路変遷や「葛西用水」整備、そして「ダム役割」をテーマに13号まで発行しました(図1)。



既刊『水のFORUM』

「見沼田んぼ」を残したい

水のフォルム発足時から、流域の水の主軸は河川ですが、大地を潤す水「農業用水」を知りたく、同時並行でさいたま市見沼区から緑区に広がる通称「見沼田んぼ」の公有地で米作りに参加しました。

農業用水は、田に水を張り一面湖水にして米を育てるだけではなく、周囲の生き物を育てます。水田を残せば洪水調節の水がめ(ローダムですが面積は広い)に

なりますし、ヒートアイランド現象緩和にも貢献しますし、都市住民の憩いの場にもなります。

見沼田んぼとは、武蔵東部に点在した池沼の中で最大規模の見沼に始まり、江戸初期に「見沼溜井」に造成され、現在の東京都足立区にまで「見沼用水」を送っていました。

江戸中期には、八代将軍吉宗の命を受け紀州から呼び寄せられた井沢弥惣兵衛為永が見沼溜井を田に造成し、見沼溜井に代わる水を利根川に求め、延長60kmの「見沼代用水」(見沼用水につないで80km)、その落川(排水河川)「芝川」を整備しました。

ちなみに埼玉東部には日本の3大用水のうちの二つ、江戸初期から138年かけて整備した葛西用水と半年の工期で整備した見沼代用水が残されています。

この農業土木遺産でもある見沼代用水と見沼田んぼは、田んぼ面積約1200ha。首都圏30km、さいたま市中央部に位置し、下流域にある川口の水害防止のため「見沼三原則」で都市開発を禁止され、農業振興地域として引き継がれてきました。

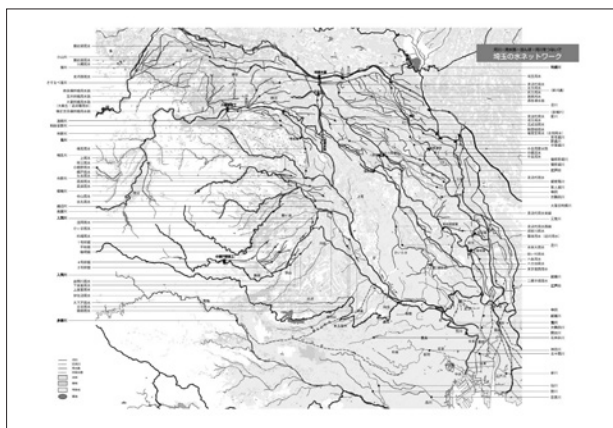
今や貴重な水とみどりの空間ですが、水田稲作は耕作者とともに水管理上、共同体も維持されていなければなりません。しかし都市に隣接するがゆえにそれらが脆弱になり、次々と畑や植木畑、公共施設に代わり、今や水田はわずか数パーセント。ほとんど遊休農地予備軍と言っても過言ではありません。

流域の水みちを示す

非農家ながらなんとか都市住民も見沼田んぼ保全に協力できないか、協力者を増やすための方策を模索する中で、『水のFORUM』6号で、荒川中流部にある大里用水の取水堰「六堰頭首工」を特集し、そこで河川図、農業用水路図を重ねた図を作成してみました。

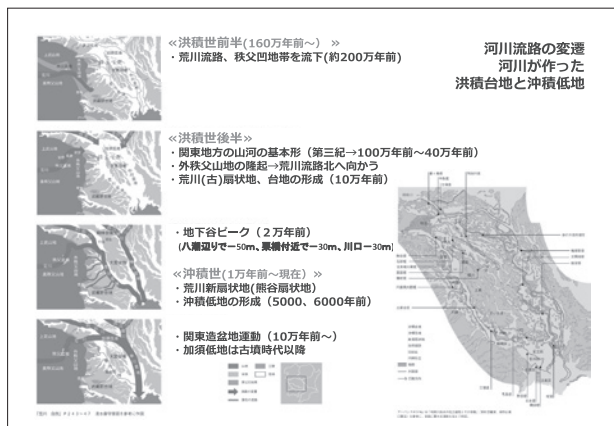
そこで浮かび上がったのが、河川－用水路－水田－河川という水ネットワーク。埼玉の場合は沖積低地が広いのでそこからさらに、－用水路－水田－河川－海、と

山地からの水を反復利用して海へ送り出す、埼玉ならではの水みちの姿でした(図2)。



埼玉の水ネットワーク

ではこの水ネットワークはどのようにして成立したのか。日本列島が出現した頃から現在に至るまでの地形・流路変遷を図にしました(図3)。

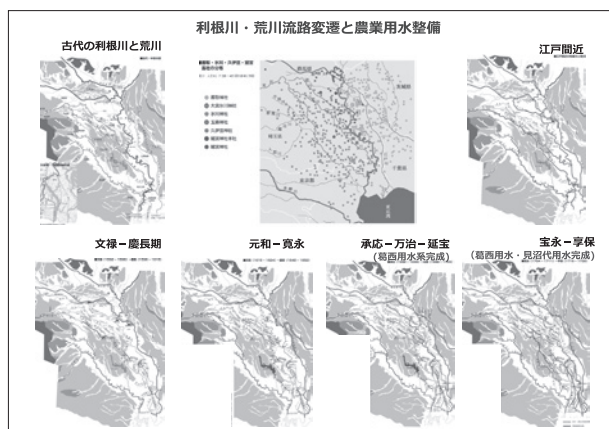


流路変遷図／200万年前～

洪積世後半に利根川・荒川・渡良瀬川・思川が現在の埼玉平野を流れるようになり、これら河川が洪積台地を作り、谷を削り、それを埋めて沖積低地を作り、それに「関東造盆地運動」が加わり、埼玉平野の骨格ができた。それを江戸期前半に、武蔵東部の主要な流路を河川に、細流を用水路に整備して、現在の河川、用水路の基本的な形になった。大地・河川・用水路の関係を概略ながら理解しました(図4)。

ということは、田んぼが用水路と河川をつないでいる。田んぼが一つ消えれば一つ水ネットワークが消える。しかもこの水ネットワークの元々は自然の水みち。大地の自然を後世に伝えたい。

それも水がつながっているからこそ、下流に責任がある。今や下流の芝川や東京湾の水質問題は富栄養化。その主な要因は農地に投入する肥料。そこで、稲株の周囲をかき回して除草しながら窒素を固定する方法



流路変遷・用水路整備図／古代・中世・江戸時代

で米をやることにしました。という大げさですが、地元では「カッパナシ」と言ってつい最近まで農家の主婦やおばさんがやっていたこと。昔からの循環型伝統農法です。

それに、利根川の水自体、上流域の終末処理場で除去できないチッソやリンが大量に含まれていますから、それにさらに肥料を入れたら富栄養化するのは当たり前。ということで私たちの田んぼでは、流域の水と土地の資源と人の手で米を作っています。稲作でチッソ・リンを減らした水を下流に送り出しているの、私たちの田んぼは水の「浄化施設」でもあります。

特定農地貸付法で里地里山再生保全

都市に隣接する農地は今、担い手不足ですが、都市には活動の必要性を理解すれば協力してくれる人手はたくさんあります。とはいえ農地は農家のもの。勝手に入り込むわけにはいきません。そこで用水路や農地のゴミ拾い、草取り、草刈りで農家支援を続けました。それがさいたま市農業委員会で認められ、「特定農地貸付法」による市民田んぼ開設を承認されました。

今、この市民田んぼでは10畝程度に小分けした区画に個人、家族、グループ、団体等が参加し、区画ごとに責任をもってカッパナシで米を作っています。

加えて、田植準備、稲刈後の片付、堆肥作りのための里山整備等の共同作業も必要です。とくに水管理は一帯の農家共同体と協働しなければ水は届きません。私たちは市民田んぼを核にして、一帯の見山地区の用水管理から農道管理まで、農家と協働でやっています。

こういった里地の再生保全に里山が関わったのは、都市住民がカッパナシをする姿をじっと見ていた田に隣接する斜面林・平地林(ヤマ)を所有する農家からの提案。早速、県が下刈をしてくれたのですが、それでも



冬の間整備した里山と用水路



田の草取り不完全で雑草が残る区画をみんなで手刈り



農家・非農家協働の用水浚い。毎年これをしないと田に水が来ない



倒壊した“はさ掛け”復旧に、平日も駆けつけてくれる仲間がいる



田植え～出穂期、当たり前の作業になったカッパナシ



用水路管理に力を入れてくれる仲間たち



みんなが働くから、子どももよく働く



年間を通じて活動を支えてくれている仲間たち

まだまだ暗く、蛇と蚊の巣窟でした。

そこで私たちも鋸で、クスギ・コナラの萌芽更新を妨げていた常緑樹を伐って、伐って、伐りまくりました。次第に林床に陽が射し込むようになり、それまでどこに隠れていたのか、ヤマザクラやスミレやランが顔を出すようになり、毎年その数が増えています。ここで秋には落ち葉掻き。冬は引き続きヤマの整備。

もちろんヤマの除伐に入る前に堆肥場を作りました。市民田んぼの稲ワラや糠、活動地で採れた野菜クズ、多少地元農家の豚糞も入れて堆肥を作っています。

さまざまな人の協働で

私たちの活動の素敵なことは、強制がないことです。活動の意味を理解し、「田んぼの約束」を守ってもらえれば、年間のスケジュール表を見ながら、各自責任をもって、できる時にできることをやっています。

夏のカッパナシでは早朝作業する人、夕方の人、雨の中の方が涼しいと言う人、平日に来る人、いろいろです。田植、稲刈、脱穀も、それぞれ二日にわたり午前、午後と都合をつけて走ってきます。休憩を呼び掛けても、「遅く来たから」「早目に帰るから」「これだけは済ませておきたいから」とそれぞれが判断。

というのも農作業は自然が相手。計画通りには行きません。でもそれは逆に、この日、この時でないとならないということもない。だから今やるべきことを頭にに入れて、各自の判断で作業しています。

その中で、毎週土曜日に集まり、この活動の歯車を回してくれているメンバーもいます。このコアになるメンバーなしにはこの活動、スムーズに機能しません。しかしそれも二次的自然に身を置いて、その維持活動が楽しいという人たち。自主的・積極的に集まっています。だからこの活動、全員集合の写真がありません。

子どもたちも、「農地は農産物生産の場、遊び場じゃないよ」と言っているのがよく働きます。働けばほめられる。それが誇りにつながり真剣にやっています。だから怪我や事故もない。もちろん作業後のご褒美は田んぼとヤマ。思いっきり走り回っています。

農家と都市住民の協働で

こうした昔からの方法で米を作っている姿は農家にとっても嬉しい様子。当初は「何が目的だ」と言われましたが、次第に打ち解けていきました。それに逆行するように農家の高齢化が急速に進んでいます。

そこで春の用水浚いでは「事前ゴミ拾い」、夏の用水草刈りでは「事前草刈り」をしています。用水管理が楽になり、交流を深めて見山地区の環境を良くしたいためです。今では見山農家30軒とすっかり仲良し。農家の提案で用水路の除草剤散布も止めました。

私たちの田は見沼代用水の最末端。見沼代用水東縁から分水路を流れて届きます。その上流の2地区では非農家との協働がなく、「暗渠の堆積土をどうしても撤去できない」と年老いた農家が詫びに来られました。

すぐさま「屈強な男性陣求む」の声掛けで、微力・軟弱軍団も含めて8名集まり、農家4名と暗渠に潜っての作業。小一時間して撮影に走ると、「終わったよ」と一同涼しい顔。こういった作業は見山地区の用水浚いで毎年やっているし、そこで考案した土砂撤去用の道具も揃ってきたので手慣れたもの。農家との協働を築いてきて良かった、と感じ入った場面でした。

次のステップへ

学び、実践する活動をさらに充実させるために、3年前から専門家に学ぶ市民講座「さいたま・水とみどりのアカデミー」を開催しています。貴重な講義録は新書版にして広く配布しています。

市民の手で立上げ、育ててきた、水も人も物質も循環するこの活動、行政との連携も始まりました。実践活動ではさいたま市農業政策課、アカデミーではみどり推進課が、それぞれ参加や広報で協力してくださっています。

昨年スタートの「水源地・奥山との上下流交流会」は埼玉県森づくり課との連携。行政との連携は、行政・市民との間で共通認識、共通言語が増え、市民と行政の議論を充実させることに役立ちます。

なお上下流交流会は、今年は荒川上流へ足を運び、ダム見学と森林視察と交流会。すでに秩父大滝から、ダムの流木で作った炭が土壌改良に、水質浄化に届いています。こちらからは山の神に新米奉納です。

そして、そろそろ市民田んぼがしっかり維持できるようになりましたので、今年からステップIIに入ります。障害者の作業訓練に、生きもの調査に、来日・在日外国人への田植・稲刈体験等に、それぞれ機会と場を提供します。

メンバーそれぞれの得意分野で活動を広げていきますが、根幹にあるのは“流域の健やかな水ネットワーク保全”。みんな水つながりです。一步一步目的達成に向けて歩いていきます。